

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（ 文学 ） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	児玉 富美恵
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論 文 題 目 (Title of Dissertation) ジョン・キーツにおける理想の詩的世界—過去の詩人たちからの受容と変容—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授 吉中 孝志	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授 新田 玲子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授 今林 修	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		大阪大学・教授 小口 一郎	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文はジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) と過去の詩人たちとの影響関係を分析することによって、特にこれまで詳しく論じられることのなかった、キーツがミルトン批判をしたあとの時期に注目しながら、彼の精神的形成過程と彼の求めた理想の詩的世界を考察したものである。</p> <p>第一章では、キーツが<詩人>を意識し始めた頃の関心の対象が、エドモンド・スペンサーであることを指摘して、その関連する作品を分析し、この時期におけるキーツの詩作態度を探求している。また、フランス革命やナポレオン戦争に代表される当時の社会情勢の中で自国意識が芽生え、イギリス国民に<英国らしさ> (Englishness) の概念が生まれたこの時期に、その概念がキーツの作品ではどのように表現されているかを分析し、今後の詩人形成に<英国らしさ>が大きく関わっていることを考察している。</p> <p>第二章では、キーツが書簡や作品の中でシェイクスピアについてどのように語っているかを分析し、シェイクスピアが彼に与えた詩作上の要素を考察している。キーツがこの偉大な詩人に深く共鳴していく契機は批評家・随筆家であるウィリアム・ハズリットによるところが大きいことを指摘し、「消極的受容力」の思想に関して考察している。</p> <p>第三章では、キーツの「驚異の年」と言われる1818年9月から1819年9月までの作品、特に『ハイピリアン』とその改作『ハイピリアンの没落』における文体の変化、書簡に示されたキーツのミルトンへの言及の変化、に着目して、そこにミルトンへの傾倒と離反が反映されており、ミルトンからの決別は詩人としての転換点と位置付けることが可能であると論じている。さらに、キーツのミルトンに対する傾倒は、社会的上層階級に対する彼の羨望の念が関係していたことを示唆するとともに、逆にキーツがミルトンから離れた理由をキーツのミルトンの文体に対する考え方や感じ方の変化やミルトンの思想性、ブルームの言う「影響の不安」に見出している。</p> <p>第四章では、「驚異の年」におけるミルトンからチャタトンへの移行期に注目している。友人ジョン・ハミルトン・レノルズへの書簡で、キーツはチャタトンに「イギリスの言語において最も純粋な作家」と絶賛したあと厳しいミルトン批判を展開し、『ハイピリアン』の断念を明言する。突然のようにも思えるこのミルトンからチャタトンへの関心の推移を分析して、キーツにとってチャタトンの存在が保守的、伝統的文学界に挑戦する手段である純粋な<母国語>での創作を教えてくれた師とも</p>			

言える存在であったと論じている。また、この書簡と同時期に書かれた「秋に寄せて」(‘To Autumn’, 1819) がミルトンからチャタトンへの関心の移行を如実に示している作品であることを論証している。

第五章では、キーツの創作活動における最後の時期の作品の最終的な方向性を考察して、そこにスペンサーへの回帰と再度、シェイクスピアの重要性を見出している。前者の「寓意性」と後者の「消極的受容力」が「秋に寄せて」の中で応用発展されていることを指摘しつつ、さらに社会的、政治的な観点で再解釈が試みられている。

キーツの詩人としての成長過程の中でシェイクスピアとスペンサーからの具体的な影響の痕跡が論じられているとは言い難い箇所もあるが、それも全体像を捉えようとした評価すべき試みとなっている。さらにミルトン、チャタトンをめぐる議論、また、キーツの代表作の一つである「秋によせて」の中で描かれた赤い「ケシの花」のイメージに関する分析は独創的なものであり、総じて、博士論文に値する力作である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)